

工業高校における生徒の「センス」に対する教師の捉え

兵庫教育大学連合大学院（院生） 逸見 正 兵庫教育大学大学院 森山 潤

1. はじめに

本研究の目的は、工業高校における生徒の「センス」に対する教師の捉え方を構造的に把握することである。

実践的な学習課題を取り扱う工業科の授業では、時折、教師が生徒の学習の様子に対して漠然と「この生徒は『センス』がよい」と感じることもある。しかし、これまでのところ、このような捉えはあくまで感覚的なものと考えられ、授業改善に資する資料としてあまり重要視されてこなかった。

一般に「センス」とは、対象となる事柄に対して個人が持つ感覚や直感などを指している。言い換えれば、生徒の「センス」を捉える視点には、教師がどのような観点で生徒の潜在的な個性や資質、能力を見極めているかを含んでいると考えられる。特に工業高校の場合には、教師が生徒の技術的な活動に対する個性や資質、能力を「センス」として感じ取っている可能性がある。今後、工業高校における生徒自身の気づきや省察、自己学習を中心に据え、更にそれらをエスコートする教師との関係の中で「教え」と「学び」を把握するためには、このような「センス」を捉える教師の視点を把握することは有益であると考えられる。

そこで本研究では、工業高校の教師を対象に、生徒の「センス」を捉える視点や場面に関する自由記述調査を実施し、得られたコメントに基づいて作成した質問項目を用いた調査を通して、教師の捉える生徒の「センス」を構造的に把握することを試みた。

2. 研究方法

調査対象：調査は、全国の工業高校において機械系学科群（機械、メカトロニクス系学科、略して M 群）、電気系学科群（電気、電子系学科：E 群）、建築系学科群（建築、インテリア系学科：A 群）及びデザイン系学科

群（デザイン系：D 群）の各学科の中から331学科を抽出して、その担当教師を対象とした。有効回答は117人であった。（有効回答率35.3%）

調査項目：事前調査として工業高校の教師計23名を対象としたインタビュー及び自由記述調査を実施した。得られたコメントを分類・整理し、計41項目の質問項目からなる調査票を作成した。

手続き：調査は、2009年3月に郵送によって実施した。分析ではIT相関によって尺度の一貫性を確認した後、因子分析（主因子法及びプロマックス回転）を行った。

3. 結果と考察

因子分析の結果、最終解として5因子が抽出された。第1因子は、課題状況における意味の深化や掘り下げ、情報の適切な獲得などの項目を含んでいることから「熟慮性」因子と命名した。第2因子は、アイデアの更なる工夫や視野の変化、プロセスの大切さの認識などの項目を含んでいることから「探究性」因子と命名した。第3因子は、状況や課題に対する飲み込みの早さやさじ加減などの項目を含んでいることから「適応性」因子と命名した。第4因子は、得意分野の知識の豊富さや興味・関心、常識的な行動の獲得などの項目を含んでいることから「主体性」因子と命名した。第5因子は、自分のスタイルや価値観、自由な発想、独創さなどの項目が含まれていることから「独自性」因子と命名した。

4. まとめと今後の課題

以上の結果から、工業高校の教師は生徒の「センス」を課題状況における上述した5つの傾向性として捉えていることが示唆された。

今後は、本研究の追試と共に、これらの傾向性に対する生徒の意識や自己評価との関連性について検討する必要がある。